市民研会員から寄せられた

2019 年 私のおすすめ 3 作品

締め切り 2019 年 2 月 12 日、到着順に掲載

● 杉野実

1◆　Hirakawa and Matsumura “A Unique Pair of Triangles”
S. Landau “How to Tangle with a Nested Radical”
森田康夫「不定方程式論研究の現状の紹介」

掲載誌等は省略しましたが、すべて数学の論文です。最初の論文の著者 2 人は大学院生で、「辺の長さがすべて整数である直角三角形と二等辺三角形で、周と面積がいずれも等しいものは、(377, 352, 135), (366, 366, 132)の 1 組しかない」ことを証明しました。彼らは「数論幾何学の高度な技法」を用いていますが、「この問題はもっと簡単に解けるのでは」とつい思ってしまったのが、私にとっては運のつきでしたね。「(超) 楕円曲線論」という現代数学の荒野に、徒手空拳でまよいこむことになってしまいました。「もっと簡単に解く」ことは無論できませんでしたが、「二等辺三角形の定義を」少しだけかえることにより、(17, 15, -8), (13, -13, 24)と(17, -15, 8), (13, -13, 10)という、「別の整数解」をえることができました。フリー計算ソフト”Wolfram Alpha”にグラフをかかせるのも楽しかったし、なかなか有意義な体験ができたと思います。

2◆　Voluntas (journal): International Society for Third-Sector Research

「この 1 年」はなんだか、数学にあけくれてしまったような感もありますが、ここで気をとりなおして（？）、私の本来の専門に近いものをとりあげましょう。この雑誌『ボランタス』を発行している学会の名称は、日本語では「国際 NGO・NPO 学会」というそうですね。まあいいかな、日本語の「第三セクター」といういいかたの方が、国際的には変だしね。変といえば、以前この雑誌のコピーが余分に送られてきたときに、アメリカの有名大学にある事務局に問い合わせても埒があかず、日本での発送業務を受託していた会社に連絡して、ようやく事態が改善したこともありました。いかにも NPO 的…かなあ？肝心の掲載論文につ

いて言及するなら、かつては統計一辺倒だったがいまは、「近代化が挫折したアフリカでの慈善」とか「資本主義をこえようとするヨーロッパの慈善」など、よくも悪くも挑戦的な内容のがふえているといえますね。

3◆ ゲオルグ・グロデック『エスの本』講談社学術文庫

最後にまた、おもむきの全然ちがうものを紹介します。近年アドラーなどが注目され、「フロイト以外の（あるいは以降の）、（精神分析的）心理学者」もいたことがようやく広く認識されつつありますが、われらがグロデック氏は、逆にフロイトに「エス（イド）」の概念を、実質的に「教えた」という大物ながら、生涯アカデミーには行かず、風がわりな「温泉医」としてすごしたという経歴ゆえか、日本のみならず本国オーストリアにおいても、かならずしもよく知られてはいないようです。…とまあ、いく分好意的に書いてみましたが、はっきりいってトンデモです、この人の理論！だって…う～ん、「病は気から」とはいうけど、グロデックさん、伝染病などもふくめて、あらゆる病気の真因は心にある、つまり「人は病気になりたいからなるんだ！」と、言い切っちゃうんですから。岸田秀さんの「訳者あとがき」がまたグロでおもしろいです。

● 吉岡寛二

今年は、例年とは異なった視点で三つに絞りました。科学と社会について考えるときにも、社会が異なれば常識が異なるので、社会の違いを理解しておくことが役に立ちます。特に、相手の国の歴史を知ることは、非常に重要ではないでしょうか。今回、紹介するのは「中国のこと」「韓国のこと」「ユダヤ人のこと」の三つです。

1◆「チャイナスタンダードー世界を席巻する中国式ー」（朝日新聞取材班、2019 年、朝日新聞出版）

習近平氏が率いる中国共産党政府の現在の行為に対して、その恩恵（？）を受けている諸外国がどのように感じて対応しているかということを朝日新聞社特派員の視点から見たり感じたりしたことが書かれています。日々の報道ではわからない事実が書かれているので、とても面白い。私が朝日新聞社の本を推薦するとは驚きです。

これに加えて、「一冊でつかめる！中国近代史」（荘魯迅、2009 年、講談社＋α 新書）は、アヘン戦争頃から習近平氏前までの中国政府の歴史について書かれたものです。著者は中国の詩人ですが、中国共産党に対する批判が非常に強いので、中国では出版されていないと想像します（書店が置かないでしょう）。ただし日中戦争をはじめとする日本との関係においては、中国で教育を受けているので私の意見とは全く異なっていますが、その点を除けば良書だと思いました。

この二冊を読めば、中国の近代・現代・現在の概要を知ることができます。昨年は、中国

人の考え方や行動様式が良くわかる「スッキリ中国論－スジの日本、量の中国」（田中信彦、2018 年、日経 BP）をこのコーナーで紹介しました。中国国民と中国政府ほど意識・価値観が異なっているのは珍しい気がしていますが、中国を一度も訪問したことがないので、本当のところは私にはわかりません。

2◆「反日種族主義－日韓危機の根源－」（李栄薫編著、2019 年、文藝春秋）

外国に関する情報では、昨年のダントツだと思います。この本の日本語版は 11 月 15 日に発売されたのですが、年内に約 40 万部も売れたそうです。韓国語版は 7 月に発売され、何週間か販売数 1 位を記録して 10 数万部を超えるベストセラーになりました。

私は、日本語版が発売される前に日本語字幕付きユーチューブで殆どの講義を視聴していました。批判本はあまり好きではないのですが、韓国人が韓国人に対して（国内で議論を巻き起こすために）書いた本なので、推薦してもまあいいかなと思いました。

自称徴用工問題、日本軍慰安婦問題などに関して、6 人の経済史学者らが歴史的資料に基づいて異論を唱えています。その異論は、小・中・高の韓国教科書の反日的な内容を真っ向から否定するものですから、韓国のマスコミは傍観しているというか反応の仕方がわからないといった感じです。韓国人・韓国の中で解決してもらうしかありませんし、日本は静観するのが一番いいと思います。

韓国の国民性を知る上では、「なぜ韓国人は借りたお金を返さないのか～韓国人による日韓比較論～」（シンシアリー、2019 年、扶桑社）がすごくわかりやすい本でした。中国や韓国は地理的には近いのですが、文化の違いからくる意識の違いは、欧米諸国、イスラム圏、アフリカ諸国などよりも大きいと感じています。

3◆「ユダヤ民族が迫害された理由」（高原剛一郎、2019/7/20、ユーチューブに東住吉キリスト集会が up）

ユダヤ人といえば、誰でもナチスによるホロコーストを思い浮かべるでしょう。イスラエルの建国、アラブとの対立、アメリカ国内での影響力などいろいろあるのですが、旧約聖書を（日本語要約版を読んだだけで）しっかりと読んでない私にはよくわからない。日本国内では古くはイザヤ・ベンダサン著「日本人とユダヤ人」（1970 年）によって、ユダヤ人に関することがクローズアップされたことがあります。日本社会では「満場一致」は好ましいことと考えられていますが、ユダヤ社会では「満場一致は否決」という考え方が書かれていたことは、今も記憶に残っています。

今回、初めてユーチューブを紹介します。

https://www.youtube.com/watch?v=Xs32VhoNCmA

演者独自の見解ではありますが、説得性のある内容です。（キリスト教系の）同志社大学で特別講義も行っているユーチューブもありますが、学生が寝ることもなく真剣に聞いてい

る状況が想像できます。一時間半余りですが、時間のあるときに映画を一本見るつもりで視聴してみて下さい。

● 鈴木 綾

1◆ 『マイク』アンドリュー・ノリス／著 最所篤子／訳　小学館　2019 年 10 月

ISBN：978-4-09-290635-8

5 才の時からテニスの試合で頭角を現してきたフロイドは 15 才の今、練習や試合の時、邪魔をしにくるマイクに悩まされていた。
ついに大事な試合の最後のサーブの腕をマイクがつかみ、動かせなくしてしまった時、マイクは自分にしか見えていない存在だったとわかる。テニスの練習の替わりに精神科医とのセッションが始まり、何の意味があるのかと疑いながらマイクとのことを話し合ううちにフロイドは自分の心底の思いと向き合うことになる……。

自分の真の望みを模索している十代とその親に、こんな本（生き方）もあるよと薦めたい。マイクは誰の心にもいる、その声を正しく聞き取ることはむずかしいが、それこそが生きていくことの意味だとのあとがきは沁みる。マルチな才能ある子どもの親こそ読むべき本かも。上野千鶴子氏が『わたしも、昔は子どもでした。』（かもがわ出版）の中で、優等生ほど親の期待に応えて競争に勝ち続けようとずっとガンバリ続け、ある日、自分がやりたいことがわからなくってしまうと書いている。人生の最期にああ面白い人生だったと言えるのが最高の生き方でしょうにと。

2◆ 『ゴースト』ジェイソン・レノルズ作　ないとうふみこ訳 小峰書店 2019 年 7 月

ISBN：978-4-338-28720-3

ゴーストはギネスブックを見て世界一の記録を覚えるのが大好きな中 1 男子。本名はキャッスルだが名乗るニックネームはゴースト。

三年前、酔った父親が、彼と母に銃を向け、発砲した時、文字通り命からがら逃げ出した自分が幽霊のようだったから。運よく弾にあたらず、父は刑務所に行ったので、母とゴーストはスラム街のアパートのリビングで寝起きしている。自室のベッドで寝ると寝床から母と逃げたあの夜を思い出してしまうのだ。以来、逃げ足の速さでは誰にも負けない。ある日、公園で見知らぬ中学生たちが走っているところに出くわす。いかにも目立つ彼らのユニフォーム姿に対抗心を燃やしたゴーストはボロボロのスニーカーにジーパンで勝負を挑む。その走りっぷりを監督に見込まれゴーストはそのランニングチームの一員となる。何か問題を起こしたら即、追い出すぞと言われるが、早速翌日、暴力沙汰を起こしてしまう。タクシードライバーで生活しながらライフワークとして中学生ランナーを育てている監督は熱くゴーストを鍛える。どん底の家庭状況で反社会的な行動をしながらも母を思い、監督の下、

走ることで仲間を得て自分を見つめ、成長して行くゴースト。自分からは逃げられない、でもなりたい自分に向かって走ることはできるという監督の言葉が響く。

3◆ 『天才ルーシーの計算ちがい』スティシー・マカナルティ著　田中奈津子 訳
講談社　2019 年 4 月　ISBN：978-4-06-515262-1

タイトルから SF?と思ったら、主人公の設定以外はとてもリアルな物語。12 才のルーシーは 4 年前、落雷にあたり九死に一生を得たが、脳には影響が出た。左脳のダメージを補おうと右脳が急激に活発に働き出し、突然、数学の天才に！(後天性サヴァン症)一方、異様に潔癖になり、座る前には「3 回立って座って」のおまじないをしないと落ち着かず、円周率の数字がアタマの中を占領する。小学校では「問題児」扱いされ、祖母の判断で通学をやめてホームスクール学習に。PC 授業も受け、4 年後の今や既に大学で学ぶ資格もとれた。しかし、ネット大学の授業を受ける気満々のルーシーに祖母は 1 年でいいから普通の中学へ行けという。中学で「友達を一人以上作る・家の外の活動をひとつする・経済や数学以外の本を 1 冊読む」ことができたら大学へ行ってもよいと。ルーシーは 1 年ならサヴァンを隠して生き延びようと決意する。お節介でおしゃべりなウィンディとカメラ小僧のリーヴァイと共に捨て犬の里親さがしボランティアに参加すると、興味なかったはずの保護犬キューティ・パイに惹かれる。数学以外にも興味を持ち始め、ウィンディのお泊りお誕生会にも参加するが、そこで許しがたいことがおきる。怒りのあまり、学校でも激昂するルーシー。誰を、何を、信じたらいいのか。数学なら正解があるのに。ネット上の数学オタク仲間にも解けない難問を解くにはどうしたらいいの？

人生は数学だけじゃわからない。数字をいくら合わせても「私」はそれ以上の存在なのだから。どんな天才にとっても、リアルな友と何事かを経験する喜び・悲しみこそが「生きている」ということなのだ。

● 上村光弘

1◆今村洋平《tsurugi》
（シルクスクリーン、あいちトリエンナーレ 2019 出展。制作動画も）

あいちトリエンナーレ 2019 は表現の不自由展・その後ばかりが注目されているが、実際に足を運んでみて、他にもおもしろい展示がたくさんあって良かった。とくに、この作品の制作過程の動画を見て、目をむいた。何千回もシルクスクリーンを動かして剣岳周辺地図を立体的につくっているのだ。計算してまちがえずによくこんなことができるなあ！と感嘆した。

２◆『基準値のからくり』

（村上道夫、永井孝志、小野恭子、岸本充生、講談社ブルーバックス、2014 年）

本書で、安全という概念がよく理解できました。本書では「リスクゼロを意味しない」「受け入れられないリスクがどれぐらいかについて社会が合意をもつことで安全という抽象的な概念が具体的・抽象的に議論できるようになる」「これにもとづいて基準値が定められ、守られることで社会は安全を確保できるという考え方」と、まとめている。どれぐらいのリスクを受け入れられるのか、みんなで議論することが必要だが、実務としては国で有識者の意見をもとに決めている。予測・評価・判断を伴う科学を従来型の科学とは区別して、レギュラトリー・サイエンスという。基準値はレギュラトリー・サイエンスの領域である。問題は「みんなと議論」という時、誰とどう議論するのか、どう決めるのかということで、国によっても異なっている。その点も例（クジラ・イルカ食、犬食、昆虫食、フグ食など、食文化の例が多い）を示して紹介していて、おもしろかった。安全は絶対的なものではないのだ！

あと、「大きなリスクを下げるのはそれほどコストがかからないが、小さなリスクをさらに小さくするにはむずかしいのとコストがかかる」ひとつの対策を進めすぎると、別のリスクへの対応がおろそかになる。結果として全体のリスクが増加する。費用な面からも適切なレベルを設定することが、最終的にはリスクを小さくすることになる。」という記述に納得した。

3◆　映画「ニューヨーク公共図書館　エクス・リブリス」

（フレデリック・ワイズマン監督、2017 年）

205 分（3 時間 35 分）と長時間だったが、全然苦にならなかった。日本の図書館が行財政改革でどんどん指定管理者制度を進めているのと対照的だ。ニューヨーク公共図書館は市立でも州立でもなく、独立法人で市の出資と寄付で財政基盤がなりたっている。本館ひとつの図書館ではなく 88 の地域分館、4 つの研究図書館とのネットワーク組織になっている。public は官ではないのだ。本館の建物や内装もすごくかっこいいし、レファレンス、データベース、地域分館のアウトリーチなどのサービスも非常に充実している。ホームレスでも拒否されない。どこから資金を調達するのか、予算をどう配分するのか、どういうイベントを計画するのかなど、といった理事会での運営にかかわる議論も何回か出てくる。イベントで招かれるのも有名人ばかりでびっくり（個人的には、リチャード・ドーキンスが最初にゲストで出てきたのが興味をひかれた）。日本人でも図書カードをつくれるそうなので、もしニューヨークに行けたらつくってみたい。『BANANA FISH』（吉田秋生）の舞台でもあるし・・・・・・。

● 瀬川嘉之

毎年、私のおすすめ 3 作品って書きにくいなあ、と思ったら、募集が 12 月に出るのに締切が 2 月で、読んだのが年内なのか年度内でいいのか、はっきりしないのも一因。
と責任転嫁させてくれる、忘年会の季節にいかに 1 年のことを忘れているか、実感させてくれる、ありがたい企画です。

というわけで、全部、12 月の話。3◆を読んだのは 1 月 2 日ですけれど……。

1◆カール・マルクス　日本共産党中央委員会社会科学研究所監修
『新版 資本論 第 1 分冊』新日本出版社、2019 年

12 月 23 日、読書会に参加しました。
いまや経済学の主流とも目される進化経済学の源流。

2◆ 吉田裕・荒敬ほか『敗戦前後』青木書店、1995 年

昭和天皇と五人の指導者　12 月 28 日から 30 日に読みました。
特に日本国憲法の「生みの親」幣原喜重郎。
「世界の輿論」を操作するための武力放棄。
「ウソ」つきでなければ外交官や政治家にはなれない、
「歴史の歪曲」ができなければ指導者の資格はない？

3◆ アジアに対する日本の責任を問う民衆法廷準備会編
『天皇ヒロヒトの戦争責任・戦後責任』樹花舎、1995 年

以下、チコちゃんの森田アナ風に
天皇は戦争について知らなかっただの、
軍事の素人で詳しいことはわかってなかっただの、
情報がちゃんと伝えられていなかっただの、
平和主義者でそんなに積極的に関与していなかっただの、
軍部を抑えて終戦に持ち込んだだの、
神話を信じる「日本人」のなんと多いことか。
神話を創ってなんぼの天皇。
陳述者いわく、このままだと歴史認識、国際認識が
歪んでいると世界から見られているのに気がつかない。
今年、五輪に韓朝中露米の首脳をそろえ、
神話をやめて、戦争責任を認めたらどうでしょう。
なんで天皇は責任を認められないの？

と聞かれそう。
もう一人の陳述者いわく、
チコちゃんの回答風に
「根っこには民衆の不安とか空虚がある」からー。
江戸かるた「ウソから出たマコト」ではなく、
不安とか空虚をマコトで埋めたい。

● 山口直樹（北京日本人学術交流会責任者）

1◆ 佐高信『いまなぜ魯迅なのか』(集英社新書,2019)

本書は、「1904 年、秋、仙台」と題された章から始まる。

これは、魯迅と石原莞爾が交錯する場が、1904 年の仙台だったからである。

そのとき魯迅は、23 歳、仙台医学専門学校の学生、石原は 15 歳で陸軍地方幼年学校の学生だった。魯迅は、この仙台でスパイ容疑によって中国人が銃殺される映像を見るという「幻燈事件」に遭遇して専門を医学から文学へと転換させていた。石原莞爾は、その 27 年後の 1931 年 9 月 18 日に関東軍の軍人となり、満州事変を引き起こすが、魯迅は、そのときはすでに中国に戻り日本帝国主義に抗する論陣を張っていた。

この両者は対極的な存在であり、友とはなりえない。

むしろ師であり友であったのは、魯迅のノートを丁寧に添削してくれた仙台医学専門学校の先生だった藤野厳九郎だった。

本書によれば、佐高氏が、NHK の番組「名作をポケットに」の案内役として仙台を訪問したのは、2002 年だったという。実をいうと私は、1996 年ごろ、この仙台で佐高信『さらば会社人間―思想的故郷としての魯迅』(徳間書店,1994)を読んでいた。それ以前から佐高氏の著作は、愛読してはいたが、そのときこの本こそが佐高氏の主著だと思った。

「ドレイの主人もまたドレイである。」と喝破した魯迅は、人間の解放は、ドレイがドレイの主人に成り上がるのではなく、人が人を支配する制度そのものを改革することなくしてありえないと考えていた。佐高氏は、学生時代、友人に「日本人にはマルクスやウェーバーよりも魯迅が必要だ。」という手紙を書いたことがあるというが、それは日本人の企業社会におけるドレイ精神からの脱却が、何よりも重要だと考えていたということを意味している。

聖人君子のきらいな魯迅は、「私は天国をきらいます。支那における善人どもは、私は大抵きらいなのでもし将来にこんな人々と終始一所にいると実に困ります。」と述べていた。

ここでいう「支那における善人ども」とは日本における「いい人」であるだろう。

「「いい人」はしばしば「どうでも」がつく「いい人」になる。」とは佐高氏の言葉だが、これは言い得て妙な言葉である。

というのも日本の長いものに巻かれ忖度するドレイ社会を支えているのは、こうした「い

い人」たちであるからである。日本にはこのような「いい人」が多すぎる。

本書のタイトルの問いに立ちかえろう。「なぜいま魯迅なのか」

それは、魯迅の哲学が、ドレイ精神からの脱却をはかるための日本人にとって毒にも薬にもなる劇薬であり、日本の忖度社会への「批判と抵抗の哲学」であるからである。

私は、本書を読んで佐高氏を北京にお招きした時のことを思い出していた。

2015 年 11 月、佐高氏に北京の中央財経大学で中国人学生にむけて日本の会社のことを講演してもらったり、私の主催している会で話をしてもらったりした。そのきっかけとなったのは、北京大学に竹中平蔵が講演で招かれてきていたことであった。魯迅は、「北京大学は暗黒勢力と闘う大学だ。」といったことがあるが、その北京大学に日本の会社主義の権化ともいえる竹中が招かれていたことに私は、強烈な違和感をもった。佐高氏を北京に招いたのは、そうしたことに対する私なりの抵抗であった。そのとき佐高氏を北京の蔡元培記念館や魯迅博物館に案内したのだが、現代中国において魯迅もまた、忘れられかけているということについて議論したことがある。本書で佐高氏は、毛沢東の魯迅に対するほめ殺しに近い賛辞に対して異論を述べているが、それはそのこととともかかわる問題である。

魯迅は、日本の支配者にとってだけでなく、中国の支配者にとっても「やっかいな存在」であり続けているのだ。これは逆説的に「批判しぬく」魯迅の思想の本物さを示すものである。

本書は「魯迅と日本」に重点を置かれて書かれているが、「魯迅と中国」という視点をあわせて複眼で見るために私は、長堀祐造『魯迅とトロツキー』(平凡社,2011)と併読することをお勧めしたい。

2◆ 石井知章、及川淳子編『六四と一九八九:習近平帝国とどう向き合うのか』(白水社 2019)

天安門事件から 30 年が経過した。しかし、依然として現代中国では天安門事件は、タブーである。だがその天安門事件を真摯に考察しようとする中国人も存在する。

本書は、そのような中国人、アメリカ人、日本人の論文をまとめたものである。

本書の目次を示すと以下のようになる。

[目次]

序章 「六四と一九八九」 石井知章
第一章 習近平と天安門の教訓 アンドリュー・J・ネイサン(大熊雄一郎訳)
第二章 「六四」が中国を変え、世界をも変えた 胡平(及川淳子訳)
第三章 天安門事件の歴史的意義 王丹(大熊雄一郎訳)
第四章 三十年後に見る天安門事件 張博樹(大熊雄一郎訳)
第五章 天安門事件が生んだ今日の中国 李偉東(大熊雄一郎訳)
第六章 趙紫陽と天安門事件ーー労働者を巡る民主化の挫折 石井知章
第七章 「一九八九年」の知的系譜ーー中国と東欧を繋ぐ作家たち 及川淳子
第八章 新全体主義と「逆立ち全体主義」との狭間で 矢吹晋

終章 「六四・天安門事件」を読む 及川淳子
あとがき 石井知章
執筆者略歴

このなかの日本人とは北京で知り合った人が多い。

中国人では張博樹が、現代中国におけるリベラリズムを代表する論客で以前、中国社会科学院の研究員だったが、現在は、アメリカのコロンビア大学の研究員として研究を行っているようである。

張博樹には『新全体主義の思想史』(白水社 2019)という著作があるが、現代中国では右派に位置づけられる論者である。

右派と聞いて、日本の右翼やネトウヨを思い浮かべる人がいるかもしれないが、実は中国では右派と左派が、逆になっている。

つまり保守が、左派でリベラルが右派なのである。

日本では新左派という思潮が、『現代思想』(青土社)などで紹介されることが多い。

これも日本や欧米の新左翼をイメージしてはならない。

なぜそうなっているのかを説明すると長くなってしまうので、それは梶谷懐『日本と中国－「脱近代」の誘惑―アジア的なものを再考する』(人文書院 2015)での説明に譲る。

この『新全体主義の思想史』(白水社 2019)への考察から独自の論を展開しているのが、中国研究の大ベテランである矢吹晋氏である。

まず矢吹氏は、現代中国の思想のスペクトルを左から①毛左派②新左派③中間派

そして右から①急進自由派②温和自由派③憲政社会主義④党内民主派⑤新権威主義

と分類し、天安門事件以降の 30 年でまず毛左派、新左派、中間派が合流に向かって動いた。

右派も「立場が揺るがない反体制派」と党や国家にすり寄るグループに両極分化し、中間派は沈黙するにいたったことが述べられる。

そこから導かれているのは、「立場の揺るがない反体制派」は孤立の道を歩んでいるということであり、天安門事件以降 30 年たつが、民主化は進んでいないという政治的には厳しい現実が、示されている。習近平体制になってからは、人権派弁護士や知識人が逮捕されることも多くなっている現実にも言及がなされている。

左派の思想的舞台は、「三派合流」という奇妙な状態であり、官側の左の正統性というものは民間の左派、新左派と一致して歩調を合わせるようになっている。

また、習近平の「新政」には「市場化とナショナリズムを継続する」という側面があるとされる。一方、右派の思想舞台の特徴は、急速な分化ということであり、反体制派の孤立化ということであった。

そして国際的には多極化が進み、その過程で「米中新冷戦」という事態が生じてきた。

事実上、アメリカと中国の二大大国の時代に入っており、お互いに敵とはよばないものの競争者であると意識しているという。

そのなかで中国では天安門事件以降、30 年経過する民主化は一向に進展しておらず、挫折させられていることが述べられる。

その理由としては主に三つあるとされる。

第一は、ロシアのペレストロイカなどの政策が、経済的に帰って貧しくなる現実をもたらしており、中国にとってはとるべき道ではないということを、中国の民衆が選択したこと。

第二には、アメリカにみられるような資本主義世界への夢への幻想の崩壊といったものがあること。ごく一部の富裕層が富むが、大多数の人々は貧しい状態に置かれ、経済格差が拡大する資本のグローバリゼーションの現実、またリーマンショックのような恐慌をも目撃し、資本主義世界に幻滅したことなどがあげられる。

第三には、中国は経済成長に成功して世界第二位の経済大国になることによって民衆の不満をおさえたことなどがあげられる。

そして、このままいけば 2024 年には中国は、アメリカを追い抜き世界一の経済大国になると予想されている。

そして、このように勢力の逆転が起こるとき戦争が起こりやすいのだともいう。これを「ツキディデスの罠」と呼ぶ。

コロンビア大学のネイサンは、「天安門事件以降の 30 年、中国共産党は「持久戦」を続けている。いつまでこれが可能かは歴史だけが教えてくれる。」と述べているそうだが、この論文の中ではこの 30 年の大きな変化として中国社会全体のデジタル化が分析される。

日中ナショナリズムの応酬の過程で日本メディアが見逃しているのは、中国の IT 技術の発展だと矢吹氏は見ている。矢吹氏は、中国のデジタル化の進行した政治形態を電脳社会主義と呼んでいる。

トヨタの看板方式から QR コードが生まれ、中国はそれを取り込み経済のデジタル化が進行したという。中国は、日本よりもはるかにデジタル決済が進み、GDP も日本の三倍にまで膨れ上がっている。

その中国に対してトランプは警戒を強めている。中国企業のファーウェイの CEO がカナダで拘束されたり、アメリカからファーウェイが締め出されたりしているのは、そのあらわれであろう。ファーウェイは 5 G といわれる通信をけん引している中国企業である。

このままいけば、半導体産業や宇宙開発においてアメリカは、中国に追い抜かれてしまうということを警戒しているのである。

そして、5 G 後半におけるコンピューターは、現行のコンピューターでなく、量子コンピューターであるとされる。

米中貿易戦争や米中新冷戦といわれるものの背景あるのは、量子コンピューターの開発競争だというのである。

量子コンピューターにおいては量子暗号が用いられるが、2016 年に量子暗号に関して中国はアメリカを抜いてトップに躍り出たという。

この量子暗号は、敵が解読できないものである。そしてこの量子コンピューターは、敵の

通信をも解読してしまえるため敵のステルス戦闘機などは丸裸にされてしまうという。

また、中国は 2016 年、8 月 16 日、量子衛星の墨子号を打ち上げることに成功している。

世界最初の光量子コンピューターは、2017 年 5 月 3 日に誕生した。

これを成功に導いたチームのトップの科学者は、藩建偉という 1970 年生まれの中国科学技術大学(安徽省合肥に設立されたとびぬけた科学の才能を養成するための大学である。北京にある北京科学技術大学と混同してはならない。)とオーストリアの大学で学んだ人物であった。現在は、中国科学技術大学教授である。

この光量子コンピューターの開発には、中国科学技術大学、中国科学院、アリババ、中国科学院物理学研究所が共同参加している。

またアメリカの AAAS(米国科学振興協会)は、2019 年 1 月 31 日に 2018 年の「ニューカムクリーブランド賞」を藩建偉らに与えたらしい。中国人科学者の受賞は 90 年以上のこの賞の歴史のなかで初めてのことであるという。

本書からは民主化が進行しない中国のなかで量子コンピューター研究が進展し、それを警戒するアメリカとの間で米中貿易戦争、米中新冷戦が起こっているのだということが読み取れる。日本のマスメディアでは、ほとんど報道されないので貴重なものだといってよいだろう。

３◆ 荒巻正行『巨人の箱庭―平壌ワンダーランド』(駒草出版 2018)

北朝鮮の平壌は、日本にとって近くて遠い都市である。本書はその近くて遠い都市、平壌を北朝鮮建国 70 年目にあたる 2018 年に都市論として考察した書である。

著者の荒巻正行は 1968 年大阪生まれ、アメリカのメリーランド大学カレッジパーク校人文学部東アジア研究学科卒業。中国、首都経済貿易大学大学院留学。早稲田大学大学院修了修士(国際関係論)。北京を拠点に研究活動を行い、1997 年からほぼ２０年間にわたって北朝鮮の平壌の現地調査を行った人物である。

著者は平壌のことを「ガラパゴス都市」だという。

つまり第二次世界大戦後、世界はソ連を中心とした社会主義陣営とアメリカを中心とした資本主義陣営に二分され、冷戦体制の時代に入る。

東アジアの中核には社会主義国の中国があり、北朝鮮は社会主義陣営の末端に位置する小国として時代のエアポケットに入り込むことに成功する。

北朝鮮は国際社会から注目されることがないという利点を生かし、独自の国造りを行っていく。

しかし、1990 年代に入ると北朝鮮の隠れ蓑だった冷戦体制が崩壊し、それをはじめとする東欧の社会主義国が「転向」を遂げると北朝鮮は、世界からがぜん関心を集めるようになる。

北朝鮮は、最後の全体主義国家として西側陣営と対立し、国際社会を無視し、核開発を続け、大陸間弾道ミサイルを発射する危険な国家「悪の枢軸」と認識されるようになった。

北朝鮮は、極端な閉鎖政策をとり、対外的な関係を一切断ち切り自ら神秘性を演出してきた。

冷戦後、北朝鮮の国家自体は、表にさらされることになったが、内部に存在する平壌という都市は、国際社会のブラインドスポットに入り込んでしまったと著者はいう。

この意味で平壌は、外部から隔絶された「ガラパゴス都市」だというのである。

著者は、18 世紀のオスマンによるパリ改造計画から都市の歴史を説き起こし、平壌は、「金日成主義」というひとつのコンセプトだけでつくられた特殊な都市だと論じる。

しかも平壌にある代表的な建築物は、ソ連時代の社会主義リアリズムの影響を受けたスターリン様式の建築である。平壌にはスターリン様式の建築物が多く残されているという。

本国のロシアでもアイデアだけで建築物はほとんど残っていないスターリン様式の建築物を 1970 年代から 80 年代にかけて建築させたのは、北朝鮮の二代目の金正日だったという。

本書では、平壌にある代表的な建造物について写真とともに具体的な歴史などが詳しく記されており、貴重である。

たとえば、ここで興味深い建築物を紹介するならば、そのひとつとして、三代目の金正恩が、平壌の「未来科学者通り」に 2015 年につくった「科学の塔」をあげることができるだろう。

二代目の金正日が、主体思想に基づき「主体思想塔」を建設したのに対し、三代目の金正恩は、「北朝鮮の未来の希望は科学力であり、これからは能力主義の時代だ。」と述べ思想から科学へのシフトチェンジを象徴する建造物を建設したのである。

通りには 10 棟以上の超高層住宅が建てられそこには新時代の象徴として科学者や教育者が優先的に住まわされたという。

これを国家は大々的に宣伝し、若者たちは将来の職業として科学者を夢見るようになる。

著者はこの「科学の塔」のような建築物を君主制時代のバロック建築になぞらえ SF バロック建築と呼ぶ。そしてこう書いている。

「今の平壌にあるのは、大阪万博に代表される「科学万能時代の高揚感と同じなのだ。当時の日本と現在の平壌を比べると金正恩の新科学地区は、「人類の進歩と調和」がテーマの大阪万博会場そのものに見える。」

なお平壌で科学技術の豊かさを象徴するものとされているのが、2010 年代から急速に普及し始めた携帯電話なのだという。

後半部分は、建築物の写真、そして絵画、ポスター、平壌の少女の写真が多く盛り込まれている。

1950 年代から 70 年代ごろまで日本の知識人にとって北朝鮮を、ユートピアのように考えられていた。日本から帰国事業で多くの在日朝鮮人が、北朝鮮に帰国した。

だが、その後、連絡が取れなくなった人も多い。

その後、北朝鮮は、血筋による権力の移譲を行い世界を驚かせる。

金日成から金正日へ、そして金正日から金正恩へと権力は移譲された。

このようなことが行われたのは、世界でも北朝鮮だけであろう。

ソ連でも中国でもキューバでも行われなかったことが、北朝鮮でだけ行われた。

本書は、この特殊な国家、北朝鮮の首都、平壌という都市を知るための重要なガイドブックであると思われる。

なお、著者は北京を研究の拠点に置いているが、北京は、日本人にとって北朝鮮への入り口という意味を持つ都市でもある。

たとえば、北京大学の寮には、北朝鮮からの留学生がおり、扉に北朝鮮の国旗をはっていたりすることも多い。(北京大学の中国語のクラスで韓国人と同じクラスになったりすることはあるようだが、酒席で同席したりしないようにしているようである。)

また、北京大学の国際文化祭では、北朝鮮のブースがでていたりもする。

街に出れば、北朝鮮の女性の踊りを鑑賞しながら北朝鮮料理を食べることのできる店も見つけることができる。私は、そこの女性に一緒に写真に写ってくれないかというと「それはできないです。」と断られたことがある。こうした北京の北朝鮮料理店にいる女性たちは、おそらくは、エリート階層の子女であると考えられる。

また、北京には日本人向けのフリーペーパー『TOKOTOKO』があるが、そこに北朝鮮行きの観光ツアーの広告が載せられていたこともある。

もっとも「非国民の雑誌だ。」という抗議の電話が、北京在住の日本人から寄せられたとも聞いている。

爆風スランプというバンドは、日本でも広く知られているが、そのドラム担当だったファンキー末吉という人は、北朝鮮に独自のパイプをもっている人物である。

北朝鮮の学校で少年、少女にドラムを教えたりしているらしいが、本書の著者もファンキー末吉氏と北朝鮮を訪問したりしているらしい。

本書の最後で著者は、「20 年かけて自分の足で平壌の街を歩いてわかったことは、ここには子供のころから自分の中で形成されてきた未来都市のイメージがそのまま実現されているという嘘のような事実だった。アニメやマンガのフィクショナルな世界観が都市として実際に成立しているのである。」と述べ、そのアニメやマンガの例として諌山創『進撃の巨人』を挙げている。著者が諌山創『進撃の巨人』から得たのは、「城壁都市」という概念であった。『進撃の巨人』は突如として現れた「巨人」と呼ばれる特殊生命体が城壁に囲まれた人間世界を襲う物語であるが、著者は、平壌こそが城壁に囲まれた現実の「城壁都市」なのだという。

そして、これに加えて平壌の具体的イメージがつかめたものとして日本の特撮映画をあげている。その特撮映画とは、『シン・ゴジラ』である。

この映画の要諦は、ゴジラがいきなり完成形で現れるのではなく、第一形態から第四形態に至るまで体系的に物語を展開させたところにあると著者はいう。平壌という都市もゴジラ同様、何段階かの指導者の変遷を経て完成形に至ったのだと。

その意味で「平壌とは『進撃のゴジラ』である。」という。これが本書で著者が導き出している結論である。だとするならば、私もまた平壌とは無縁ではない人間だということになる。

なぜなら、北京で「放射能と原子力を考える日中サイエンスカフェ」としてゴジラ映画や北朝鮮の怪獣映画『プルガサリ』(1985)(ゴジラの中身とプルガサリの中身は同じ人がやっていた。薩摩剣八郎『ゴジラが見た北朝鮮―金正日映画に主演した世にも不思議な怪獣役者の体験記』(ネスコ 1994)を見よ)の上映会を行ってきたのは、私自身であったからである。

● 橋本正明

1◆ パナソニック株式会社ブランドコミュニケーション本部Ｗｏｎｄｅｒ推進室編

『ヒラ社員が閃いた！パナソニックの知恵袋』2018 年　ＰＨＰ研究所

これはパナソニック社の社内掲示板サイトに投稿されたアイデアの数々である。

この掲示板サイト名はその名も「Ｗｏｎｄｅｒ知恵袋」、社員は匿名でここに自分たちの悩みを投稿したり、他の人たちのお悩み解決を提案してみたりと日々色々な問題について自由に発想し、投稿されているのである。

「３人集まれば文殊の知恵」という諺があるが、およそ 27 万人ものグループ内の社員の方々がアイデアを出し合ったら…。想像を遥かに超えたイノベーションが起こっても不思議ではないだろう。

確かに本を紐解くと、おうちのアイデア、移動のアイデア、健康のアイデア、安心のアイデア、エンタメのアイデア、未来のアイデア、など多岐の分野に渡る様々なイノベーションのタネ（グッド・アイデア）たちが所狭しとひしめき合っていた(笑)

それにしても、パナソニックさんは懐が大きい。

本にして世間に惜しげもなく公開する情報だけが全てではないだろう。

きっと、今ごろは奇想天外なアイデアが世界を震撼させるイノベーションに成長を遂げようとしているところかも知れない。

私たちも負けてはいられない。

頑張ろう。明日のために(笑)

2◆ 『ねことじいちゃん』

岩合光昭 初監督 主演：立川志の輔　原作：ねこまき

これはタイトル通りの映画である。だがしかし、この映画には現代の日本の地方が抱えている問題の縮図がある。

この映画を監督した岩合光昭という動物写真家をご存知だろうか。彼は世界を飛び回って（私の知る限りでは）猫の写真を撮っているその筋ではとても著名な方である。これまで

にも彼はドキュメンタリー映画を撮ったことがあるが、この映画は彼の初監督作品で同名タイトルの漫画が原作である。

小さな島の小さな漁村での生活、愛妻と死別しての孤独、遠距離に住む息子との心の距離、進まない終活、増える空き家、毎日が忙しい若先生（医者）、オシャレなカフェを新たに営もうとする美しい女性、そして仲良しの幼馴染み同士の恋の再燃と突然の…

それらの日常を猫たちが緩やかに、そして何事も無く永遠に続くかのように見守っている。切なく、そして陽だまりの猫のようにふんわりと温かい物語なのである。

３◆ NHK ETV 特集「アイヌらしく 人間らしく～北海道 150 年 家族の肖像～」

これは元々、2018 年の暮れに放送されたものの再放送であった。私の実家は北海道で物心ついたときから彼らの存在は何となく分かってはいたが、特段意識には上らなかった。しかし年齢を重ねるにつれて和人に迫害されつつも強く生きてきた彼らに敬意の念を抱かずにはいられなくなった。

北海道となって 150 年（本放送当時）というが、これまでの政策や居住・生活環境を鑑みる限りでは彼ら独自の文化に敬意を払っているとは到底思えない。そしてなぜ未だに彼らは、学術研究の名の元に迫害されねばならないのか理解ができない。

同意なく自分の先祖の墓を暴かれ、持ち去られる悲劇。そしてそれを看過するどころか研究を称賛する学会…。こんなのはおかしい。

しかし、勇気をもって同僚の研究者たちに『謝りましょう！！』と泣きながら呼びかけた良心あるひとりの研究者の姿に心打たれた。

この番組に対する心無い意見もあるようであるが、私は意見の賛否を問わず視るべきものとしておススメしたい次第である。

● 角田季美枝

１◆鶴見俊輔（2010）『教育の再定義への試み』岩波現現代文庫、岩波書店、222p、980 円＋税、ISBN 9784006031992

大学で担当している科目に社会教育実習がある。社会教育主事資格課程の専門科目である。しかし、私は社会教育が専門ではないので、社会教育主事資格課程、博物館学芸員資格課程を履修したり、公民館での市民提案事業を実施したりして学んでいる。2019 年度は研究休暇を取得した先生の代行で「生涯学習論講義」「社会教育論」も担当したこともあり、教育関係の本にいろいろ目を通した。その中でもっとも参考にしたのが本書だ。

鶴見俊輔が自身の人生やいろいろな事件をふりかえり、教育とは何なのかを考え、自己教育の指針をまとめている。鶴見俊輔は 1922 年生まれ、本書の初出は 1999 年なので 80 歳にならんとする時の省察になる。

ハーバード大学留学時代にヘレン・ケラーとの出会いで学んだ「unlearn」（「まなびほぐし」という日本語になっていることが多い）という言葉を授業で学生に伝えると、印象に残ったというコメントが多く戻ってきた。

本書の最後に、終活に向けた教育計画のための道しるべが掲載されている。

一　くらしそのものは、くらしの意識より大きい。そしてもっと重大なものを含んでいる。私自身のくらしは、私の考えをこえる重さをもつ。

二　記録にのこるわずかな数の個人を越える偉大な個人が人間の総体にいる。人間の総体はどんな偉大な個人より偉大である。

三　専門の思想家をこえる仕事が、専門の思想家外の人の仕事にはある。教育専門家以外の人たちによって大切な教育がこれまでもなされてきたし、今もなされている。

2◆ニコラス・クレイン (2019), 白川 貴子 (翻訳) 『ユー・アー・ヒア　あなたの住む「地球」の科学』(白川貴子訳)　早川書房、152p.、1870 円＋税、ISBN-13 978-4152098825

私の専門に関係のある書籍の中では、本書を挙げておきたい。行間をゆったりとった造本で 152p.なので、小さな本である。専門書でもない。しかし、地球環境問題に対応する身体をつくるのに非常に参考になる。

著者は英国王立地理協会の前会長でエッセイの名手といわれているそうだ。ホモ・サピエンス誕生からの人類史、世界最古の地理学者といわれた中国の禹王、アルプスの絶景、現在や将来の巨大都市と人口移動、ＡＩなど、多角的な切り口で、歩くことのおもしろさを紹介している。

おもしろかったのは、電子機器を何ももたずに歩くうちに身体感覚が変わっていくくだり。また、1878 年、アメリカで、子どもたちに歩いて地図感覚を身につけることの重要性を解いて実践していた女性（ルーシー・S.ミッチェル）がいたことも関心を引いた。

現在、ナビやスマホの地図に見慣れてしまって、場所を鳥瞰して見ることがあまりなくなり、スポット、サイトとしてとらえるようになっている。しかし、歩いて頭のなかで地図をつくっていくと身体に刻まれる。ふだんはばらばらな地図が思いもよらぬところでつながると、すごく興奮する。そういう体験が、たとえば、自然災害被災時にも役立つのではないかと思う。

3◆「霧の抵抗　中谷芙二子」

水戸芸術館現代美術ギャラリー及び広場、2018 年 10 月 27 日（土）～2019 年 1 月 20 日（日）

https://www.arttowermito.or.jp/gallery/lineup/article_5022.html

2019 年 1 月 13 日に足を運んだ。その日の関連イベントは参加者多数で参加できなかったが、展示だけではなく、屋内の霧インスタレーション、広場の霧の彫刻を体験した。

中谷芙二子（1933-）は雪の研究で知られる物理学者、中谷宇吉郎（1900－1962）の娘。

1970 年、大阪万博ペプシ館での「霧の彫刻」以降、人工霧を使った作品で自然と人間の関わりを問い続け、「霧のアーティスト」といわれている。今回の企画展は日本初の大規模回顧展だそうだ。

展示では、ペプシ館での霧発生装置の設計図や関連資料も展示されていた。霧は普段見えている風景を見えなくさせるので、どこにいるのか、となりに何／誰がいるのかもわからなくなる。時間感覚も失う。自然環境の中での人間個人の存在を実感できる装置でもあることが体験も通じてよくわかった（というか写真展示だけではわからなかっただろう、というほうが正確かもしれない）。

展示は霧の彫刻だけではなく、中谷がかかわったビデオ作家の作品の紹介のコーナー（チッソ本社前テントでのデモなど、社会批判の作品が多い。当時のビデオ機材も展示）や、「E.A.T」メンバーとして取り組んだプロジェクト《ユートピア Q&A 1981》（1971 年）も興味深かった。このプロジェクトは、世界 4 都市をテレックスでつなぎ、10 年後の社会、経済などについての質問を投げ、東京、ストックホルム、ニューヨーク、ボンベイに住む人びと（ジョン・レノン、手塚治虫など）が自由に返答したもの。展示では 40 名の回答が紹介されている。この時の 10 年後の 1981 年はもはや 40 年前。時を隔てて読むと、時代を感じるもの、普遍的なもの、さまざまだ。

はじめは企画展のタイトルになぜ「抵抗」とあるのか不思議だったが、自然の中の時間の流れと社会の中の時間の流れの「抵抗」という点で共通しており、それを通じて近代社会に「抵抗」している作家と感じた。

なお、展示風景の一部は前掲の水戸芸術館の案内より美術手帖のウエブサイトのほうが充実している。

「いつでも変わることができる。霧のアーティスト・中谷芙二子が「霧の抵抗」で伝えたいこと」（2018 年 10 月 27 日）

3◆「ある編集者のユートピア　小野二郎：ウィリアム・モリス、晶文社、高山建築学校」

世田谷美術館 1 階展示室、2019 年 4 月 27 日（土）～6 月 23 日（日）

https://www.setagayaartmuseum.or.jp/exhibition/special/detail.php?id=sp00193

現在、小野二郎の名前を知っている人はどれぐらいいるのだろう。私が 1980 年代読んでいて人生の方向性を考えるのに影響があったのは、晶文社の本が多かった。小野二郎の本も翻訳も含めて何冊か読み、いまでもひっかかる内容がたくさんある。

小野二郎（1929～1982）は晶文社の創業者でもあり編集者、ウィリアム・モリスの研究者である。小野二郎の企画展があると知ったのは、世田谷美術館の学芸部長（当時）の橋本善八さんからだ。橋本さんは和光大学 OB でもあり和光大学博物館学芸員資格課程で教鞭をとっている。「文学館ならともかく、なぜ美術館で小野二郎？　と最初に提案された時、多くからそんな意見が出た」と、ふりかえっていた。

企画展案内によれば、「W・モリス、晶文社、高山建築学校の 3 部構成で小野二郎の“ユー

トピア”を探る」展示である。小野二郎の思想がどのように練られてきたのかを順に追うという素直な構成で、教育者としての側面にも光をあてていた。一室がまるまる晶文社のＰＲコーナーになってしまったのは仕方ないだろう。面陳されると、晶文社がどういう出版社なのか、あらためてよくわかる。

個人的には高山建築学校での授業シーンが動画で流されていたのが一番興味を引いた。「ああ！　こういう風貌の、こういう声の、こういう語り方をする人だったんだ。こんな人たちが聞いていたんだ」と、現実として迫ってきた。動画という技術が作家の人となりを伝えるのに非常に有用と実感したと同時に、再生技術・機器・部品の保存も必須と感じる。文学館ではなく美術館での企画展にこだわった担当学芸員のこだわりは、高山建築学校の石のモリス・テーブル（小野二郎を偲んでつくられた）を見て納得した。1 階展示室の砧公園をバックにした一番大きな窓のある明るい部屋にドンと置かれ、静かに存在を主張していた。この石がこの展示をしめくくる。運搬の労も含めて、関係者のみなさま、本当にお疲れ様である。

2019 年 6 月 1 日の講演会「『陽性の親和力』の運動」（話し手：津野海太郎（評論家・元晶文社取締役）、聞き手：矢野　進（本展担当・当館学芸員））、2019 年 6 月 22 日の講演会「高山建築学校の小野二郎―white mountain noon college へ―」（講師：石山修武（建築家））にも足を運んだ。都合 3 回展示を見に行ったことになる。複数展示を見たのは久しぶりだった。

ユートピアは、急逝によって自身では追究できなくなってしまった。しかし、遺した書籍や交流のあった人びとに種はある。花を咲かせ、森にしたいものだ。

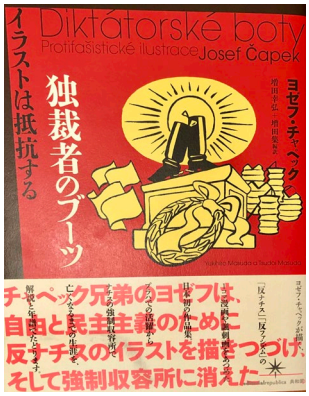
● 丸山節子　（認定 NPO 法人 難病のこども支援全国ネットワーク・事務局）

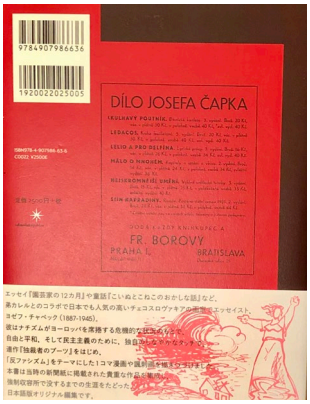
1◆ ヨゼフ・チャペック＝著、増田幸弘＋増田集＝編訳
『独裁者のブーツ　イラストは抵抗する』共和国

［版元ドットコムでの紹介ページ］https://www.hanmoto.com/bd/isbn/9784907986636

チェコスロバキアの画家でエッセイスト、ヨゼフ・チャペック（1887～1945 年）による、反戦・反ナチ・反ファシズムをテーマとしたイラストや風刺画・戯画を集めた日本版（オリジナル編集）です。

チャペックが「指揮官の靴をシンボルに独裁の本質を描く」という意図で勤務先の「リドヴェー・ノヴィニ（人民新聞）」で連載を開始したのは 1937 年 1 月で、軍靴に踏みにじられてゆく社会と人々を風刺画で描き続け、1945 年に強制収容所で消息を断ちました。第二次世界大戦中のチェコスロバキアについての理解も深まり、イラスト満載で、貴重な記録になっていて、読みごたえある 1 冊です。





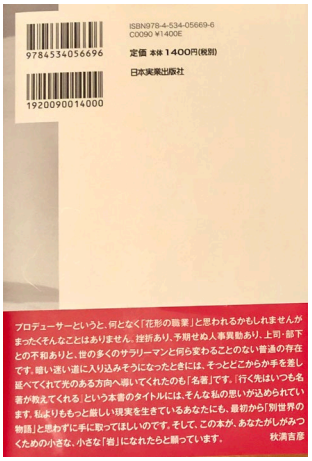
オーボエ奏者で、吉井瑞穂という方がいます。世界的なオーケストラで首席を務める実力の持ち主。昨年、何度かコンサートに行き、少し言葉もかわしています。11 月、彼女の師であるモーリス・ブルグさん 80 歳の記念演奏会がヤマハホールでありました。そこでは、チェコスロバキアのユダヤ系作曲家で、アウシュビッツで処刑された作曲家バヴェル・ハース（1899～1944 年）の作品がありました。「オーボエとピアノのための組曲 Op.17」です。年末に読んだこの本で、この作曲家についても思いを馳せました。

2◆ 秋満吉彦＝著『行く先はいつも名著が教えてくれる』日本実業出版社

［ALL REVIEWS での紹介ページ］https://allreviews.jp/review/2900

［『100de 名著』公式サイト］https://www.nhk.or.jp/meicho/

NHK E テレの人気番組『100de 名著』のプロデューサーが、著者が生きてきたさまざまな局面において道標となった著作やことばを紹介しています。



表紙は砂丘を歩くサルトル。「ありとあらゆる世界史的事件に対して常に弱者、抑圧された人々の立場に立ちながら、果敢に論陣を張り続けたサルトル」は、高校時代から筆者の憧れであり続けているそうです。

第 2 章で紹介されている、岡倉天心の〈「余白」として働いてみる〉から。

【「水差しが役に立つのは、その形や材質によるものではなく、水を容れるからっぽの空間によるのである。虚はすべてを容れるが故に万能であり、虚においてのみ運動が可能になるのだ」が今の私には支えとなるような気づきを与えてくれることばでした】

このような形で著者がこころを開き、素直に想いを語っています。とても入りやすく読みやすく、名著を生んだ作家たちのことばが身近に感じられ、閉塞したこころにひとすじの光を差し込ませてくれるすばらしいらしい本だと思います。なお、2 月には、刊行記念イベントとして、著者とフランス文学者の鹿島茂さんとのトークがあり、そこにも参加しました。市民研の上田さんも参加され、トーク後の懇親会では多くの方と交流ができて、楽しいひとときでした。今後も『100de 名著』から目が離せません。

3◆ 映画『あまねき旋律（しらべ）』

2017 年製作／83 分／インド、原題『Up Down & Sideways』

［公式サイト］http://amaneki-shirabe.com/

ミャンマーとインドの国境近くナガランド州。急勾配の斜面に棚田を作り生活するナガ族の農耕歌。四季の暮らし。インド政府軍の弾圧にも屈することなく、自分たちのあるべき暮らしを守り続けている人びと。何も足さず何も引かず、ことばと歌とともに映像は淡々と流れていきます。住民の 9 割がキリスト教徒というこの村の歌は、ゴスペルのようなハーモニー。

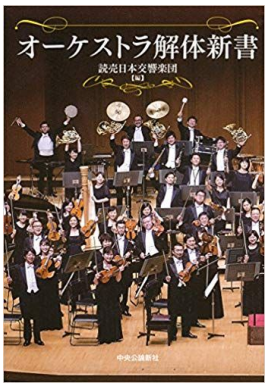
山々や空、棚田の風景の美しさ、谷を越えて響く歌声、人びとの表情のすがすがしさ・・・・・・「いのちのかがやき」がここにあるのでした。人びとに寄り添うように映像は流れ、じんわりと感動がしみてくる秀作だと思います。

● 白井基夫（医療生協さいたま生活協同組合・本部）

1◆ 読売日本交響楽団・編『オーケストラ解体新書』中央公論新社

2017 年 9 月、1400 円（税別）

［読響での紹介サイト］https://yomikyo.or.jp/2017/09/post-539.php



クラシック音楽ファンでなくても楽しめるノンフィクション。オーケストラの内実を、巧みな構成で、見事に描ききっている。指揮者の人間像、リハーサルから本番までのドタバタ、経営の裏側、ステージマネージャーやライブラリアン（譜面の管理や手配を行なう専門職）の業務の実態、楽器運搬のノウハウなど、細部にわたって記述している。その細部がとてもおもしろい。

キャンセルが発生し、五嶋みどりが出演することになったあたりが白眉。なかなかこういう情報に接することはできないし、読んでいてスリリングであり、引き込まれる。

2◆ 「クラ懇」

一昨年から、市民研の事務所を借りて、「クラ懇」と呼ぶ集まりを持っている。「クラ懇」の正式名称は決めていないが、クラシック音楽懇話会というあたりでいいと思う。

メンバーには上田さんも入っており、ほかに私を含めて 4 人。最初、友人たちと酒を飲みながら音楽談義をしていたが、上田さんもクラシック音楽ファンだし、市民研事務所だと、音楽も映像も再生できてカネも会場費とおやつ代くらいですむ、ということに気づいて、現在のような形態になった。

今年の 1 月までに 6 回、開催してきた。各回テーマを決める。過去の開催日とテーマは、以下のとおり。土曜日の午後いっぱい、夜まで、音楽談義三昧。

① 2018.09.08（土）　ベートーヴェンの交響曲第 5 番
② 2019.01.19（土）　ピアニスト
③ 2019.03.30（土）　歌
④ 2019.06.15（土）　室内楽
⑤ 2019.09.14（土）　19 世紀以降の合唱入り作品
⑥ 2020.01.11（土）　協奏曲＆2019 年の 1 枚

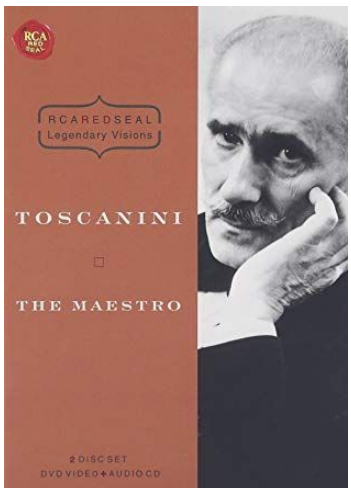
どの回も全員参加。ちなみに次回は「交響曲」。好きな交響曲、変わったスタイルの交響曲、知られていないが名曲と思われる交響曲、聞きあきたようでやっぱり忘れられない交響曲など、解釈は各人まかせ。

「恐ろしいな」と思うのは、「クラ懇が生きがい」と明言してはばからないメンバーがいること。なるほど、本当にクラシック音楽について、ともに語る場はなかったのだ。音楽を聴くことは幸せ感をもたらすが、その音楽を通じて語り合う仲間は、限りなく大事な存在だと思う。

3◆ DVD『トスカニーニ　ザ・マエストロ』

20 世紀の大巨匠といえば、トスカニーニ（1867～1957 年）とヴィルヘルム・フルトヴェングラー（1886～1954 年）だろう。カラヤンといえども、この二人を脇において大巨匠とはいえない。

トスカニーニといえば、性格は短気で強権的、そんなイメージしかなかった。ムッソリーニを批判して米国に亡命したくらいは知っていたが、突っ込んで調べたことはなかった。クラシック音楽ファンとしては、まったく恥ずかしい限り。



昨年、たまたまこの貴重な記録があることを知り、しかも、中古が安価だったので入手した。89 歳まで生きたトスカニーニは、SP の時代から二つの世界大戦を越えて、テレビの時代までなんとか生きた。このこと時代が驚異的だが、80 代前半まで、元気に歩き、立ったままで指揮棒を振っていた。

ムッソリーニ批判、ヒットラー批判は容赦なかった。オーケストラには「音ではなく音楽だ」と迫り、厳しい姿勢でのぞんだのと同じ。現在のように指揮者の地位が確立されておらず、オペラでは歌手のほうが威張り、リハーサルも、楽団員のおしゃべりがやまないような時代。オーケストラと劇場の改革をしながら、ファシズムと闘い、家族を愛し、船旅ではオーケストラの団員と談笑し、ハイキングも率先して企画して団員のだれより早く歩き……。ほんとうに、トスカニーニを見直したのだった。

● 東さちこ（PEACE 代表、ダーウィン会員）

1◆ 『生命科学クライシス―新薬開発の危ない現場』
リチャード・ハリス著　寺町朋子訳　白揚社

「これまでに発表された論文のなかで、間違っているものがあまりにも多すぎる。」「無駄な努力のために医学は停滞している。」

日本のマスコミ報道に日々晒されていると、生命科学は目覚ましく発展しているかのように思い込まされてしまいますが、この本は、そういった作られたイメージをことごとく打ち砕く本です。

追試を行った論文 53 件のうち再現できたのは 6 件だけという、製薬企業「アムジェン」による衝撃的な公表を皮切りに、ライフサイエンス論文の再現性の低さはどこからくるのかを探っていく、近年の知見の集大成的な本ですが、そもそも動物実験は信用できるのか？

というところにも踏み込んでいる点で注目しました。脳卒中、鎮痛剤、敗血症、ＡＬＳ治療薬などの分野で研究が行き詰っている理由に、動物モデルの「怪しさ」（科学的妥当性の問題）が挙げられています。

また研究者が持っているバイアス（偏向）についても指摘されており、実験を盲検にすることが科学性を高める一つの手段として挙げられていますが、日本の動物実験で盲検になっているものがどれだけあるのだろう？と思うと、もしかして壊滅的なのではないだろうか…と思ってしまいました。

そもそも研究不正（捏造・改ざん・盗用）が多いことも不信感をもたらしますが、都合のよいデータだけ取り上げて論文を書く「チェリーピッキング」や、有意差が出るように統計分析を操作する「Ｐ値ハッキング」なども、一般社会の感覚では詐欺的な行為にあたるのではないかと感じます。

著者はそれでもなお、改善に希望を持っているようですが、科学的に誠実と言える生命科学研究はどれほどあるのだろうか、果たして本当に改善されていくのだろうか（特に日本で？）と思わざるを得ませんでした。「科学の成果・進歩」を信じている多くの人に読んでほしい本です。

2◆ 『ビーガンという生き方』マーク・ホーソーン著　井上太一訳　緑風出版

ここのところ、ビーガン（ヴィーガン, vegan）という語を、普通にテレビなどでも耳にするようになりました。（昨年、この本が出た時点でもそう感じましたが、最近はもっと頻繁に見聞きするようになったと感じます。）

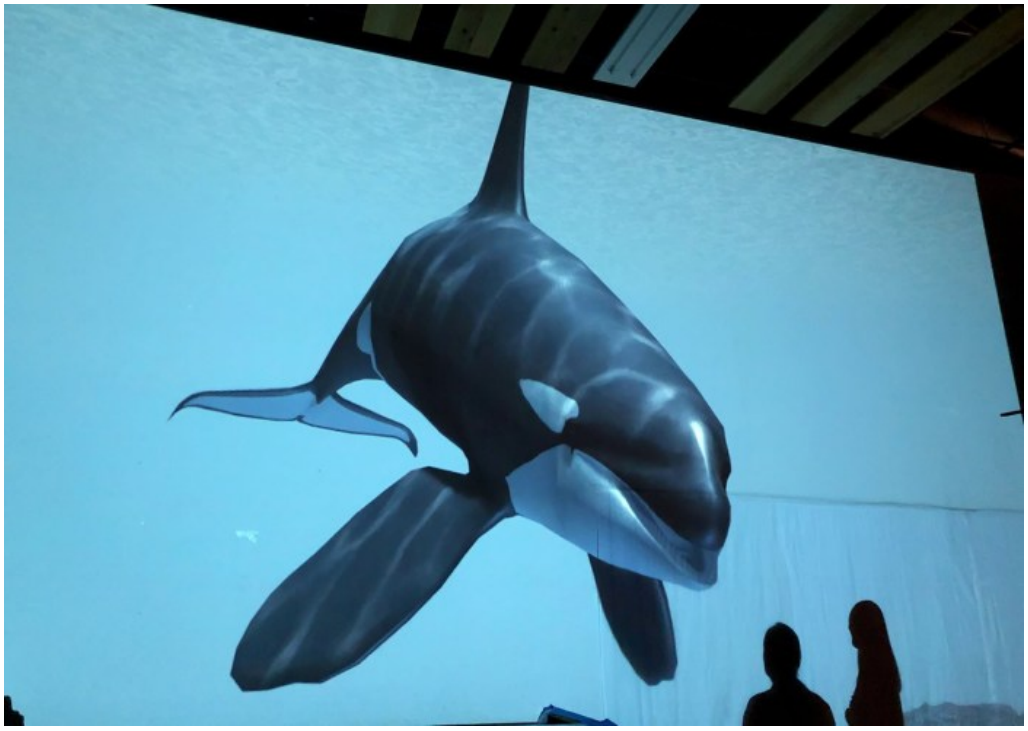
30 年ほど前に肉食を止め、徐々に動物性食品も止めてビーガンを実践してきた身としてはうれしいところもある反面、「おしゃれ」「健康」「女性に人気」といったイメージ先行になっているところが気になります。日本では「完全菜食主義」などと訳されることも多く、食の問題だと受け止められがちなビーガンについて、本当はどういう思想的背景があるものなのか、わかりやすく丁寧に解説した入門書が本書です。

ビーガンは、動物搾取の産物をできる限り避け、動物たちをそれらの搾取から解放する社会正義のための運動です。肉や牛乳、卵を得るために虐げられている動物たちだけではなく、毛皮や皮革のために犠牲になる動物たち、動物園・水族館などに幽閉される動物たち、そして動物実験の犠牲になる動物たちなどについて、幅広く動物搾取の問題をとらえています。またこの本では、動物搾取の問題にとどまらず、人間に対して行われる搾取、差別や、環境問題との関わりについてページが割かれており、これらの運動との連帯の重要性についても説かれています。

入門書として、栄養やハウツーについても書かれていますので、すべていきなりは無理と感じられる方も、本書のアドバイスを参考に、ビーガン生活に足を踏み入れてみていただけたらうれしいです。

3◆　「遊ぼう守ろう　クジラ・イルカの海」

2019 年 11 月 24 日＠港区立エコプラザデジタル動物展示「ライトアニマル」と
ドルフィンスイム・ガイドの草地ゆきさんのお話



デジタル技術による次世代の動物展示システム「ライトアニマル」がすごいと聞き、都内で体験することのできる機会に参加してきました。

「ライトアニマル」は、クジラやイルカが、まるでそこで泳いでいるかのように投影されるだけではなく、「お腹を見せて！」というとお腹を見せてくれるなど、インタラクティブな反応も楽しめ、なおかつ学びになる、スグレモノのデジタル展示です。

野生下では広い行動域を持つ鯨類を水槽で飼育することは本来無理があり、虐待でもあります。イルカやシャチのショーに代わる技術として、「ライトアニマル」のようなヴァーチャル展示に期待をします。

「ライトアニマル」なら、自然な行動も、珍しい行動も再現でき、本当はどんなところで泳いでいるのかも見せることができます。水槽を維持しなくてよく、エネルギー消費等の面からもエコです。野生からイルカを捕まえる必要もありません。

生きた動物を幽閉することでストレスを与え、観客に不自然な行動を見せ続けている動物園・水族館の在り方に一石を投じる技術だと感じました。

この日は、ドルフィンスイム・ガイドをされている草地ゆきさんが、野生のイルカの素敵なお話もしてくれました。野生のイルカが体をこすりつけるようにするラビング（Rubbing、こすること）は、親愛の情を示す行動といわれていますが、水族館のイルカではほとんど見られないといったお話が印象に残りました。

● 林 浩二

2019 年中にわたしが見た 100 ほどの展示／展覧会／博物館の中から選びます。 結果的に５展示＋α となりました。

1◆ 横浜美術館開館 30 周年記念　Meet the Collection ―アートと人と、美術館

（横浜美術館；横浜市）2019.4.13～6.23。後半は 7.13～9.1

https://yokohama.art.museum/exhibition/index/20190413-531.html

現代美術家を招いて作品を制作あるいは再制作した同じ空間に同館の 30 年の活動で収集したコレクションを配置して対比するというユニークな試みの展示。
特に淺井裕介がこの展覧会のために制作した、円形の展示会場の壁をうめつくすインスタレーション＜生命の樹＞は見事だった。
後半日程までは残したが、その後この円形展示会場の作品は消えた。そのはかなさも味わえた。

以下は同率で２～５位

2◆ 館外企画展「Japan Color：Where Culture Meets Nature～日本文化を育んだ自然～」2019.8.30～9.16（花洛庵；京都市中京区）実行委員会；事務局は兵庫県立人と自然の博物館

https://www.hitohaku.jp/infomation/event/legacy-kyoto2019.html

自然史博物館が伝統的建築（寺社・酒蔵・町家）で日本の自然とそれが育んだ日本の文化を展示する試みの最終回。ICOM 京都大会に訪れた多くの世界の博物館人にも感銘を与えた。

3◆ 美術館に行こう！　ディック・ブルーナに学ぶモダン・アートの楽しみ方

（ベルナール・ビュフェ美術館；静岡県長泉町）2019.4.20～9.29

https://www.clematis-no-oka.co.jp/buffet-museum/exhibitions/1091/

国内を巡回した展示。ミッフィーで有名なディック・ブルーナの初期の装幀からその後の絵本作家としての活動を網羅した展示。
この展示を見て初めて、ブルーナの絵本にはいわゆる「原画」がないことに気がついた。黒い手描きの線の図こそが原画で、あとは色指定に従って特色（４色分解ではなく純粋な色インクを使うことで）印刷されたもの。ということは、絵本の１冊、ポスター１枚、果ては切手１枚も「複製」ではなく、正統なブルーナの作品と言える。
切手シートの隅にそれぞれの特色が出ている。
自分なりの「発見」ができた展覧会はいつまでも記憶に残る。

4◆ Fermentation Tourism Nippon ～発酵から再発見する日本の旅～

2019.4.26～7.22（d47 MUSEUM；渋谷ヒカリエ８階；東京都渋谷区）

http://www.hikarie8.com/d47museum/2018/11/fermentation-tourism-nippon.shtml

発酵デザイナー・小倉ヒラクの企画で、全都道府県から 1 点ずつ「発酵食品」の実物を展示し、可能なら匂いをかぐことができるという展示。展示物は企画者によって適宜入れ換えられた。冊子、書籍も刊行。

5◆ 【特別展】アオバトのふしぎ～森のハト、海へ行く～

（神奈川県立生命の星・地球博物館；神奈川県小田原市）2019.7.20～11.10

http://nh.kanagawa-museum.jp/exhibition/special/ex174.html

海岸と山の往復という独特の行動をするアオバトを中心に、生物の移動をテーマにした展示。アオバトを永年にわたって自主的に研究しているグループ「こまたん」と博物館の共催。アオバトの行動の要約として「夏に食べるのはサクランボ・飲むのは海水、冬に食べるのはドングリ・飲むのは真水」とコンパクトにまとめてあったのが記憶に残る。Take Home Message が明確になっている好例。

番外；音声ガイドのベスト 1

◆恐竜博 2019

（国立科学博物館；東京都台東区）2019.7.13～10.14

制作：（株）アートアンドパート

https://www.kahaku.go.jp/exhibitions/ueno/special/2019/dino2019/

構成作家で恐竜好きの鈴木おさむが、展示ディレクターの真鍋真（科博）と小林快次（北大）の話を引き出す形で楽しくトーク、そして大事なポイントはしっかり押さえていた。恐竜好きが恐竜を語るという一種の理想的な形。「鈴木おさむのカハク☆ラジオ」と呼ばれたとか。これに類するのは、荒木経惟が自らの写真展の音声ガイドをした東京都現代美術館の例。独特の語り口で作品をより楽しめた記憶がある。調べたら 1999 年の展示。

● 上田昌文

本屋さんと出版社には申し訳ないが、新刊書を買うことがとても少なくなってきている。すぐに買ってでも読みたくなるような本は（私には）たいてい値段が高すぎる。手頃な価格で自分の問題関心に打って付けの本を見つけるには―おそらくノンフィクションでそうしたものは多いと思うのだが―こまめに大型書店や大型図書館に足を運んだり、ネットで書評を読んだりしないといけない。そこまで労をかけられないとすれば、はやり古書に頼ることになる。その出会いを予想していなかった、だが興味深そうな古書を、身銭を切って求め

るのは、たとえ安価であっても、私にはいつもなかなかスリリングな瞬間だ（「はたしてこの本、当たりなのか、ハズレなのか？」）。また、手に入れたいと思っていたけれど絶版となってそれがかなわなかった本に巡り合うのは、無条件に嬉しい。ここに挙げたのは、2019 年にそうして手にして読書の楽しみを堪能した本である（3◆のところの和書 2 冊は以前に読んだものです）。

1◆「本について書かれた本」から

『名著の伝記』紀田順一郎，東京堂出版 1988

『古書発見　女たちの本を追って』久保覚，影書房 2003

これらは一気読みしないではおれなかったもの。

『名著の伝記』は、余人を持って代え難い一世一代の辞書・事典の編纂や、その一冊がその著者の生涯を集約しているかに思える執念の著作の誕生の経緯を、16 種類の本を取り上げて語る。『牧野富太郎植物図鑑』や『（諸橋）大漢和辞典』や『広辞苑』といったよく知られたものから、『釣技百科』（松崎明治）や『三国探検実記』（岩本千綱）など“聞いたこともない”ものまで。とにかくどの章も目くるめく面白さで、誰しも「日本人の知的英雄ここにあり」の感を覚えて、勇気づけられるのではないだろうか。

『古書発見　女たちの本を追って』の著者、故・久保覚さんとは、私は何と大学生だった頃に面識を得ていて、彼が中心になった進めた「韓国の民衆文化を知る講座」（1980 年代後半）―申し訳ない、正確な名称は思い出せない―の運営の裏方を少し手伝ったことがある（1 年間ほど）。懐かしく貴重な個人的な思い出はいろいろあるが、今にして思うと何より自分の不明を恥じなければいけないのは、彼が編集者として比類のない目覚ましい仕事をなしてきた人だということを、当時はまったく気づけなかったことだ。「上田君、これは読んだ方がいいよ」「（当時アカデミズムでもてはやされていた“知識人”の）あの人を批判できるようでないといけないんだ」などと、さりげなく語ったことの意味が、当時はピンと来ないままだった……。私が手伝った講座も、『花田清輝全集』などで綿密極まりない編集力を発揮してきた彼ならではの、嗅覚を働かせて先鞭をつけた、文化運動の試みだったということが、今ならいくらかわかる。そんな途轍もない目利きである久保さんが選んだ、「女性たちの本」52 冊をめぐるエッセイである。驚くほど広い目配りと、やさしい語りながらも一編一編が時代への真摯な批評となっていることに、心から感服する。この美しい本が絶版であり、ここで取り上げられている本のほとんども手に入れ難いことを、久保さんが知ったとすれば、何と言うだろう……。

▶補足：久保覚さんの仕事をふりかえった、数少ない文章のひとつに、**『先生とわたし』（四方田犬彦・著、新潮文庫）**のなかの記述（96 ページから 104 ページ）がある。この著者の四方田氏もどこかで、自分の本が次々と絶版になってしまう現状を嘆いていたと思う。2019 年には彼の**『日本の書物への感謝』（岩波書店）**を読んだが、これも、美しい「本について

の本」と言えるだろう。時間を経て読み直してこそ、「古典」が「自分にとっての古典」となることをわからせてくれた一冊だ。

2◆ 文学史と音楽史の大冊の名著から

『ロシア・ソビエト文学史』M.スローニム, (翻訳：池田健太郎,中村喜和)新潮社 1976

『西洋文化と音楽』P.H.ラング,（翻訳：酒井諄,谷村晃,馬淵卯三郎）音楽之友社 1976

「あなたにとって、これまでもっとも面白く読めた、芸術を扱った通史は？」と尋ねられたら、何か一冊を挙げることができるだろうか？

音楽にしろ、美術にしろ、そして文学にしろ、世界全体はもとより何らかの文化圏を対象にして通史を書く仕事は、無数にあると思える作品群と網羅的な付き合いをある水準以上でしなければならないわけだが、それに要する労力たるや、超人的と言いたくなるほどのものであろう。その結果生まれるものが、辞典・事典的ではなく、通読にふさわしく（そうさせてしまうほど面白く）なければならない。読者にしてみれば、自分が聴いたり、観たり、読んだりしてそれなりに詳しく知っている項目を拾ってみた際に、「これは面白い！」と感じさせてくれなければならないのだ。

浩瀚、手にとってずっしりとくるのは避けられないので一気読みとはいかないが、自分の知らない作品や作者について述べている場合でも、強く「聴いてみたい（観てみたい、読んでみたい）……」と思わせ、時代を形成する多様な要素の流れや絡み合いの中で、その作品がなぜ生まれその作品たり得ているのかが描き出され、芸術の今の有り様を自分なりに理解するための、いくつもの手がかりや視点を与えられる―こうしたことに成功している通史こそ私は名著だと思うが、ここに挙げるのは音楽と文学でその筆頭に来るかもしれないと私が感じている 2 冊である。ともに絶版となって随分経過しているだろう古い本だ。そして、言うもはばかられるくらいの安値で入手した本でもある。読んでみてわかったが、「こんな名著がずっと絶版でこんな値段をつけられてしまっていいの？」と思わざるを得ない。

原著（改訂版）が 1967 年、日本語訳が 1976 年の『ロシア・ソビエト文学史』は、2 段組 920 ページほどの大冊だが（ロシア編とソビエト編の 2 巻)、古代の口承文学からペテルブルグ時代を経て、ソルジェニーツィンまで、それこそ巻措く能わざる面白さだ。現役の歴史家である Orlando Figes(オーランドー・ファイジズ)の『Natasha's Dance: A Cultural History of Russia』（Penguin 2002）も同様のボリュームの素晴らしい通史だが、両者で言及している同じ作品や作家の部分を比較してみるのも非常に面白い。

もう一方の『西洋文化と音楽』は原著 1941 年というさらに古い本だが（2 段組の 3 巻本で 1200 ページを超える)、私が思うに、西洋音楽を、音楽それ自体の領域に固着せず、＜精神史＞＜文化史＞＜社会史＞として開かれた形で語ることに成功した珍しい著作ではないだろうか。記譜と演奏によるその再現という現象一つとっても、私たちの今の常識とは違って、中世では楽譜は奏者の「創造（創作)」を誘発するための手引きとなっていて（タブラ

チュア記譜法)、それは音楽することと知性との関係にも関わる＜精神の様態＞の違いからも来ている、といった話をいたるところで見出すことができる。著者は 1901 年生まれの音楽家（ピアノと指揮）兼音楽学者で、40 歳の時にこの本を出したのだが、今のような CD や DVD がない時代にどうやってこれだけの音楽を聴き、楽譜などをなぞったのか……想像もつかない。

私は音楽史研究の現状にまったく詳しくない者だが、この本を超えるような"開かれた"音楽史の本があるのなら、ぜひ読んでみたいと思う。

▶補足：『ロシア・ソビエト文学史』に一章が割かれている（第 27 章）ボリス・パステルナークは私が最も好きな作家の一人だが、彼の唯一の長編小説『ドクトル・ジバゴ』は映画化されたことを通じて、多くの人に原作が恋愛小説の名作であるとのイメージを与えることにもなったと思われる（原作の小説はもっと多面的で、哲学的散文詩とも言える独自の佇まいを持つ作品になっている）。2019 年にひょんなことから、その映画のメイキングビデオが YouTube にあることを知り、観ることとなった。監督デビッド・リーンの制作過程の驚くべき裏話の連続で、息もつかせぬ面白いビデオだった。この映画監督の芸術家・職人としての一徹さと誠実さは深い尊敬に値するのではないだろうか。お時間のあるときに、どうぞ。
ドクトル・ジバゴ撮影秘話 1～5
https://www.youtube.com/watch?v=SHCbbZm9U0o

3◆ 少し前に出版されたものだが、一般科学書のお手本として

『How We Live and Why We Die : the Secret Lives of Cells』Lewis Wolpert , Faber & Faber; Main edition 2010

『The Way of the Cell : Molecules, Organisms, and the Order of Life』Franklin M. Harold, Oxford University Press 2003

『冷蔵庫と宇宙―エントロピーから見た科学の地平』マーティン・ゴールドスタイン ＆ インゲ・F. ゴールドスタイン（翻訳：米沢富美子,米沢ルミ子,森弘之）東京電機大学出版局 2003

『絶対微小: 日常生活を量子論で理解する』マイケル・ディビット フェイヤー (翻訳：丑田公規,吉信淳) 化学同人 2013

私見では科学書は 3 つに分類できる。「教科書」「専門書」「一般書」である。3 つ目がいわゆるポピュラーサイエンスの本に相当するわけだが、誰もが認める一流の専門家であり、教科書的な要素も上手に織り込みながら、それこそ「関心はあるが知識はない」どんな素人をも、そのストーリテリングの魅力でひっぱっていって読ませてしまう、という著者は、さすがに欧米でもたくさんいるわけではないように思う。

ここに挙げた本は、現代の科学と技術の根幹に関わる概念である「細胞」「量子」「エネルギー・熱・エントロピー」を知るのに、私が思うに最適の、一般科学書である。

英語の本を挙げたのは、これらがまだ訳されていないからだが、素晴らしく読みやすい英語で書かれていることも伝えたいからだ。発生生物学や細胞生物学に多少詳しい人なら、これらの著者の業績については耳にしたことがあるのではないか。特に、Wolpert 氏には『ウォルパート発生生物学』（メディカルサイエンスインターナショナル 2012）という実に理解しやすい見事な教科書があったり、『ヒトはなぜうつ病になるのか:世界的発生生物学者のうつ病体験』（ミネルヴァ書房 2018）という本もあったりで、テレビやラジオにも積極的に出演されて語っておられ、サイエンスコミュニケーションの観点からも注目すべき存在だと思う（同じく発生生物学の世界的教科書を出している Scott F. Gilbert 氏もそれに通じるところがある）。また Harold 氏の方は最近、『To Make the World Intelligible: A Scientist's Journey』を出されたようで、広く一般に語る姿勢がより強く打ち出しているのかもしれない。

『冷蔵庫と宇宙』と『絶対微小』の内容の濃さ、語りの上手さは多言を要しない。そう感じられるのは細心になされている翻訳のおかげでもある。このような本が絶版にならないことを強く願っている。